

リレーエッセイ 781

## 続・時間の風景

“Stereotactic Imaging Functional Neurosurgery”  
—ウメオ大学(スウェーデン)から授与されたPhDのタイトルである。

約 20年前のある日のこと、「どうする？」と隣のN先生に聞いた。

「ライター(指導医)の応援して候補やろ」とN先生。「そやな。義理があるしな」。自教室の教授選。当時は助教まで投票権があり、大学あけての仁義なき戦いが繰り広げられていた。私とN先生は、ライターが応援する候補を「よろしく」と走りまわった。みんな「応援してるで」と言ってくれたので、楽勝と思っていた。

「県立病院」の辞令を見ながら、N先生と「人の言うことはあてにならない」としみじみ思った。負け組となったが学位は頂いたので、心機一転、県立病院に赴任した。

2年後、充実した日々を送っていた私に教授から電話が入った。「ステレオ手術の希望者を公募するので、手を挙げるように」。ステレオという言葉も知らなかったし、「クリップや腫瘍の方が面白いので、ここでいいです」と答えると、「何を言っとるんや。公募するんやから、とにかく希望するんや」と一喝され、「ステレオ手術希望」と出した。医局総会で「本人たっの希望で、大学でステレオ手術をしてもらう」と発表されたときは、「ムム、またしても謀られた」と思った。いざ帰局し、手術を始めよ

うにも道具がない。調べると「ステレオフレーム」と「Schaltenbrandのアトラス」が必要であることがわかった。アトラスは図書室の奥で埃をかぶっていた。とりあえず、当時流行していたパリドトミーの手術を見学するために、九州大学の島

み合いながら、Air Mailを送った。e-mailが無い時代である。待つこと2カ月、返事が来た。

「残念ながら、私は…。そりゃそうやろ、そんな簡単に留学できるわけが…ん!? よく読むと「…弟子のハリツ教授は優秀なので、そちらを訪ねていきなさい」と書いてあった。早速手紙を書くと、暫くして突然医局の電話が鳴り、陽気な声で「コンバンワ！ When

く、昏睡状態の急性硬膜下血腫の患者さんがへりで運ばれてきた。「緊急手術」と言うと、すぐに家族のいる小部屋に通された。その時初めて、自分がインフォームド・コンセントをして手術を行うという状況にあることを知った。迂闊だった。師匠に連絡はつかないし、英語でインフォームド・コンセントなどしたことがない。おまけに承諾書はスウェーデン語で、せいぜい

めた。師匠のご自宅でワインを飲みながら、書いたというか、書いてもらったような状況で、二日酔いで出勤すると、「これ、昨日の修正」とフロッピーディスクを渡された。こうして7カ月で3本の関連論文を書き、PhDの取得を勧められ、「Ja (ハイ)」と答えたものの帰国することになってしまった。

時は流れて、視床下核刺戟術がパーキンソン病手術の中心となった。「視床下核をMRIで描出できないか」という頼みに、放射線科の田岡先生が「SUKEROKU SIGN」による描出法を開発してくれた。この論文を読んだ師匠から「Do you remember?」とメールが来た。師匠はロンドンのクイーンズスクウェアに転任されていたが、後任のバトリック教授が過去の業績を評価してくれて、14年ぶりにPhDへの道が再開された。

ところが、今のパソコンにはフロッピーディスクがない。過去のデータは利用できず、印刷物から論文集(Kappa)を作成した。余談であるがKappaとはスウェーデン語で、いわゆる「合羽」ということらしい。平成24年6月、国内外の専門家、教授で構成される審査員団と約3時間のDebateを行い、その1時間後、審査委員長から「Congratulation」と言われた。帰国の途、「ステレオの手術をせい！」と榊教授から言われたことが脳裏を過った。師匠のハリツ教授をはじめ、支えてくれた多くの人々に感謝の気持ちで一杯になった。そして思った。「続けてきて良かった」と。眼下にはバルト海が輝いていた。

## 人間万事塞翁が馬

国立病院機構奈良医療センター(奈良市)  
特命副院長

平林 秀裕



教授を訪ねた。先生は面識のない私に、手術の面白さや真髄を教えてくれた。

それから暫くして同僚の留学社行会でのこと、ご機嫌の様子に教授が「次はお前や」というので、「何がですか？」と答え、「決まってるやろ、留学！」と言われた。呆気にとられて、酔った勢いで医局に行き「どこにする？」と畳み掛けられ、まごついてる間に脳外科総会の抄録集を取り出し、「これは？」と尋ねられた。「ライチネン。パリドトミーやっている人ですわ」と答えると、「ほんまに効くんか？」と教授。「JNSにも出てるし、島先生のところでも仰山やりました」と答え、「そうか。手紙書け」。「先生、知ってはりますの？」と尋ねると、「知らん。でも書け」と迫られ、つい「わかりました」と言ってしまった。英文手紙の書き方と取っ組

will you come to UMEÅ?」と聞かれた。37歳の暮れのことであった。

ハリツ先生の計らいで3日でワーキングビザがおり、教授の推挙で県の在外研究員という身分を得て、スウェーデンへと不安と期待を胸に旅立った。時に大学の桜は満開であった。

翌日、私は雪原に立っていた。ウメオは北極圏に近い町だ。滑走路上のテントでスーツケースを受け取り、「えらいとこに来たな」と思っていると、突然、空港の待合室に陽気な声が響いた。「コンニチワ！ゼンガクレン！Welcome！」とハリツ師匠が出迎えてくれた。とても嬉しくて心強かった。

着任して間もなくのこと、師匠から「これから送別会に行かねばならないけど、急患が来るので診てくれなにか」と頼まれた。「了解」と安請け合いますと間もな

Namn(名前)とSignatur(署名)くらいしかわからない。覚悟を決めて「私は日本の脳神経外科専門医だが、ここで手術したことはない。ご主人の容態は悪く、すぐに開頭手術が必要だが、私に任せるか？術中死もありえるが」と説明したところ、「Ja tack(よろしくお願います)」と頼まれた。

執刀開始からしばらくは英語でやり取りしていたが、気がついたら日本語とジェスチャーで手術をしていた。ここで奇跡が起こった。「天、我を見放さず」である。術後、患者の意識は回復し、歩いて帰ったのである。この手術でスタッフから信用を得ることになり、私の留学生活の追い風になったのは言うまでもない。

その後、「ステレオ手術におけるMRI画像の歪み」というテーマを頂き、勉強以外にすることもないので、約2カ月で論文にまと